1999. 12. 1

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報　第31号

事務局：栃木県カウンセリングセンター内
〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9ムギショウビル2F　TEL.028-647-1717 FAX.649-1213

ＬＤが問題にされるとき

筑波大学心身障害学系
宮　本　信　也

先日、「ＡＤＨＤはＬＤ学会で取り上げる問題なんですか、それとも、日本ＡＤＨＤ学会というのでもできていくのでしょうか？」と質問された。ＡＤＨＤ（注意欠陥／多動障害）は、注意力障害と多動性・衝動性を特徴とする行動障害である。その30～50％にＬＤを合併するといわれており、ＬＤ学会の中でＡＤＨＤが取り上げられることに、普通は違和感を持たないであろう。推測するに、質問された方は、ＬＤとＡＤＨＤは質の異なる問題と考えておられ、先のような質問になったのであろうか。

この会話は、奇妙な後味を残した。それは、自分がＬＤについて話すとき、ＬＤという用語でどんな子ども達を意味しているのかを明確にしながら話してきたであろうかということであった。そしてまた、ＬＤとＡＤＨＤの話題が混在して述べられる状況に、何の違和感も感じていないこと、つまり、ＬＤの子どもに行動障害があって当然と感じていることに対する「新鮮な」驚きの思いでもあった。もし、読字や書字が苦手な子がいたとして、その子が目立たない子であればそのままにされていることもあるかもしれない。私達が、相談を受けるＬＤの子は問題行動を持っていることが多く、そのことが、単にＬＤとＡＤＨＤの合併率が高いからという理由以上に、私達がＬＤの行動面の問題を当たり前と思うような下地を作っているのかもしれないと感じたのである。これは、そのまま、問題行動がはっきりしないＬＤの子どもは、適切な対応がされないまま見過ごされているかもしれないという危惧でもあった。

私達は、学術的には、ＬＤというものをより明確に整理していく作業を行っていかなければならないが、同時に、現実の場で見過ごされやすいＬＤに対する適切な対応が行われるような環境作りを行っていくことを忘れてはならないのではないだろうか。後者の仕事は、教育の立場の方々に中心となっていただかなければならないものであろう。ＬＤを教育の問題として見ることの重要性をあらためて感じさせられた経験であった。